



五 おしっこ王子がぺらぺらになる

「それ」

「それ」

ボールが飛び交う。歓声上がる。ドッジボールの試合は白熱している。幸一君が僕を目がけてボールを投げてきた。バシ。胸で受けた。どうだ。右手を上げ、ガッツポーズをする。そして、思い切り、幸一君に向けて投げ返した。

投げた後、胸ポケットを見る。膨らみがない。しまった。と思う間もなく、バシと僕の膝にボールが当たった。顔を上げると、幸一君がガッツポーズをしている。

「勝負中に、よそ見をしていたら、ダメじゃないか」幸一君が勝ち誇っている。

僕は外野に回る。恐る恐る胸ポケットを開く。思ったとおり、王子がぺらぺらになって胸に張り付いていた。

「大丈夫かい？」王子に声を掛ける。

「だ・い・じ・ょ・う・ぶ」

王子の平面の口が動いた。でも、大丈夫じゃないみたいだ。

「ちょっと、トイレ」僕はコートから離れると、トイレに入り、胸ポケットからぺらぺらの王子を取り出した。

「どうしたら元に戻るんだい？」

「み・ず・に・つ・け・て・く・れ」王子は息も絶え絶えで答えた。

僕は手洗い場に王子を置くと、水道の蛇口をゆっくりとひねった。水滴がぽつんぽつんと王子の体にしみこんでいく。それに伴って、王子の体は丸く膨らんでいく。

「もういいよ。ありがとう」

王子の体は二次元から三次元に戻った。昼休みの終わりを告げるベルが鳴り始めた。

教室に戻らないと。僕は王子を胸ポケットに入れ、息を切りながら教室までの階段を昇った。昼からは国語の授業だ。給食を食べ、昼休みに運動をすると、昼からは眠たくなる。がんばらないと。

その頃、お腹の中では。

「ふう。やっと、終わったぞ」

うんこ大王が座りこんだ。

「そっちはどうだ。リキッド班の隊長に尋ねる。」

「はい、大王。こちらも終わりました」

「そうか。王子はまだ帰ってきていないのか」

「はい。まだです」隊長はうなだれる。

「全く困ったもんだ。こんなに仕事があるのに。まあ、仕方がない。とにかく、昼食の消化活動は終わった。主が学校から帰って、おやつを食べるまでの間、休憩だ。みんな、ゆっくりと休んでくれ」

「アイアイサー」

固体班もリキッド班も、その場にどさっと座り込んだ。作業に疲れたのか、大王を始め、隊員たちはうとうとと居眠りを始めた。